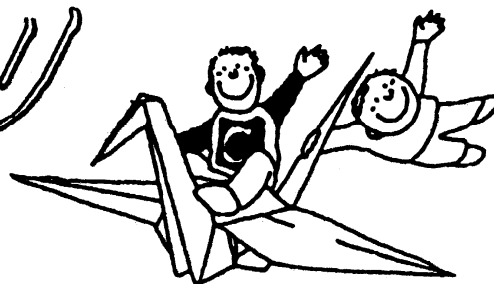


ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



チェルノブイリとフクシマを結んで

チェルノブイリから改めて学ぶ

12月初め、25年目のチェルノブイリを訪問します

チェルノブイリに並ぶ重大事故となったフクシマ

東京電力福島第一原発では、七ヶ月余り経った今も事故は完全には収束してはいません。複数の原発が深刻な損傷を受け、チェルノブイリ原発事故の30%、広島型原発の約168発分（セシウム137で比較）に相当する大量の放射性物質がすでに放出されました。さらに大気と海の汚染は、日本国内にとどまりません。

震災被害だけなら避難することもなかった20km圏内の人々が、着の身着のまま避難させられ、いつ戻れるかわからない不安の中で半年を過ごしてきました。飯舘村など30km圏を越える地域にも広がった高汚染地は「計画的避難区域」に指定されました。人口の多い中通りの都市をはじめ、福島県の半分以上が「放射線管理区域」に相当する広大な汚染地域となっています。

日本の法律では、放射性セシウムのようにガンマ線を放出する核種で4万ベクレル/m²以上の表面汚染がある場所は「放射線管理区域」に定められており、その区域内に立ち入る者は国に届け出

なければならず、個人被曝線量をモニターし、定期的な健康診断を受け、放射線防護に関する講習を受けることが義務づけられています。本来なら、そのような汚染区域に、一般の人々が立ち入ることはあってはならないはずです。しかし現在、福島県内だけでも100万人を越える人々が、子どもおとなも、妊娠中のお母さんも、「放射線管理区域」レベルの汚染地域で暮らすことを余儀なくされています。さらに、そのような汚染は、福島県だけでなく、東日本を中心に広範囲に広がっています。



村民が避難した飯舘村で、空間線量率4.48マイクロシーベルト/時。畑や道路脇には夏草が生い茂る。
(8月1日撮影)

低線量でも、その線量に応じた健康影響が起こる可能性がある～子どもたちの健康を守ろう

事故後、政府や電力会社、マスコミは、放射線レベルが上がる度に「直ちに健康に影響はないレベル」と繰り返してきました。これは何年も後に発症する可能性のある被曝による後障害を無視した発言です。福島県は「専門家」を招き、「100ミリシーベルトまでは心配ない」などのキャンペーンを行いました。このことは、子どもを含む多くの一般市民が「放射線管理区域」レベルの汚染地で毎日被曝するという「異常事態」が生じているにもかかわらず、その危険性を認めず、国や東電の加害責任を隠蔽し、被ばく低減のための施策を遅らせるという事態を招いています。

人々の健康を守るためには「どんな低い線量でも、その線量に応じた健康影響が起こる可能性がある」という立場に立って、対策にあたるべきです。とりわけ、身体の成長のために細胞分裂の盛んな組織を持つ子どもたちは、成人に比べて放射線に対する感受性がより高いことが知られています。また妊娠中のお母さんの胎内で被ばくした子どもたちは、小児がんのリスクがわずかながら上昇することが、医療被曝やチェルノブイリ後の欧州での調査でもわかっています。子どもたちの健康を守るためには、成人よりも厳しい基準で被ばくの管理と防護を行うことが何よりも重要です。

25年目のチェルノブイリ事故の被災地で、今も続く汚染と被ばく

チェルノブイリの被災地では、人々は25年間、身体の内外から被ばくし続けてきました。事故直後の放射性ヨウ素による内部被ばくのため、事故後、ベラルーシでは小児甲状腺がんが著しく増加しました。私たちが支援を続けているクラスのパーリエでも事故後の10年間に4名の小児甲状腺がんが診断されています。幸い、その子どもたちは、超音波検査による定期検査で早期に癌が発見されて手術を受けることができ、命を落とすことはありませんでした。同地区の小児科医ベールソーバさんは、25周年にあたって「近年、子

どもたちの一般疾病の発病率はやや増加。貧血の罹患率が高く、扁桃の慢性疾患、泌尿器疾患、先天的発育障害の増加がみられる」と報告しています。長期にわたる汚染と被ばくに、事故後の地域経済の低迷に伴う生活困難が加わり、被災地住民の健康悪化が続いていると考えられます。

800万人以上にのぼるチェルノブイリのヒバクシャの被ばくによる健康被害の全容が、疫学的に明らかにされるのは、まだまだこれからです。私たちは、引続きチェルノブイリのヒバクシャ支援に取り組めます。

チェルノブイリから改めて学び、その教訓をフクシマで活かす～12月に現地訪問します

ベラルーシでは、事故後、次第に法整備がなされ、クラスのパーリエのような汚染地に暮らす住民には、手当の支給、子ども達の保養を優先的に行うなどの措置がとられました。住民の定期検診や体内のセシウム量の測定は今も続けられています。長期にわたるヒバクシャの健康と被曝、食品汚染の管理が必要であるというチェルノブイリの経験は、今後のフクシマでも活かされるべきです。

フクシマでは、空間線量の高い屋外活動の制限など、子どもたちの被ばく軽減のための日々の対策

が必要とされる一方で、常に汚染や被ばくのことを子どもなりに気にしながら生活をしなければならないという精神的ストレスも危惧されます。チェルノブイリの汚染地の子どもたちへの支援の経験からも、この夏、全国で取り組まれたように、汚染のない地域で、自然の中でおもいきり遊んだりしながら過ごすことのできる保養やキャンプを継続することは、子どもたちの心身の健康にとってとても大切です。

今、福島「汚染地域」の抱える問題は、多岐

にわたります。地域の除染、避難、生活環境・労働現場・教育現場での被曝防護、汚染食品の管理、汚染農水産物に対する生産者への補償、地域経済の維持、生活と仕事の保障、医療や福祉の維持、等々。いずれも、早急に具体的な対策が求められているにもかかわらず、遅々として進まない現状があります。多くの人々が、焦りとあきらめ、将来への不安を感じながら日々過ごしています。

「線量の高い地域に住み続けてもいいのだろうか」「内部被ばくを少しでも減らすために、食べるものはどう気をつけたらいいのだろうか」「子どもたちはどれだけ被ばくしてしまったのだろうか」「どのように健康に気をつけたらいいのだろうか」「マスクはした方がいいのか」「ふとんや洗濯物は外にほしてもいいのか」「いつどんな症状が出るのだろうか」「鼻血をよく出すのだけど大丈夫だろうか」…子どもを持つ福島のお母さんたちの切実な声、不安の声を聞くにつけ、ベラルーシの私たちの友人たちも、チェルノブイリ事故の直後には、同じよ

うな不安を抱えながら過ごしてきたのだということとを改めて思い起こさせられます。そして、チェルノブイリの被災地の人々が体験してきた事故直後、数ヶ月、数年の頃の具体的な日々の生活はどんなだったか、具体的にどのように日々の悩みに対処してきたのか…成功したことも失敗したことも、改めて、いろいろと聞いてみたいと思います。そして、日本の今の実情に即して、チェルノブイリの経験を具体的にどう活かせるか…そのような「宿題」をフクシマからもらって、12月初めに振津がベラルーシの支援先を代表訪問します。12月3日～13日に訪問予定で、12月18日の「救援関西20周年の集い」でも、報告します。ぜひ、ご参加を！そして、できれば来春に、クラスノポリエの小児科医ベーラさん、チェリコフの教師バーリャさんに、日本に来て頂くようお願いし、福島でも交流したいと先日の「運営会議」で話し合いました。

広島・長崎の被爆者の経験にも学び～国の責任でフクシマでも「健康手帳」の交付を

「安心して暮らせる福島、きれいな福島を還せ。故郷を還せ。もとの生活を還せ。」というのが、人々の心の底にある共通した思いではないでしょうか。故郷を奪い、福島を放射能で汚染した原発事故、それを引き起こした国と東電の責任が厳しく問われるべきです。どんなに時間と費用、労力がかかろうと、国と東電の責任で最大限の施策を行わせねばなりません。とりわけ被災者の健康を守るためには、すでに避難した人々、及び汚染地域に住

チェルノブイリとフクシマを結んで…

これ以上、決して繰り返させない！

福島原発で起こった事態は、日本中のどの原発でも起こりうるのです。原発推進をやめ、再生可能なエネルギーへの速やかな転換をはかるべきです。停止中の原発の再稼働も、新たな原発の建設も、原発輸出も許してはなりません。これこそが、チェルノブイリから、またフクシマから私たちが学ぶべき教訓、次の世代に対して果たすべき責任ではないでしょうか。

んでいる福島県民全員に、広島・長崎の原爆被爆者に交付されているような「健康手帳」を発行し、国の責任で検診などの長期の健康管理を行い、疾病の早期発見と医療を行う体制を整えることがぜひとも必要です。原爆被爆者の方々も、被ばくの苦しみの中から粘り強く運動に取組まれ、このような制度を勝ち取ってきたのです。



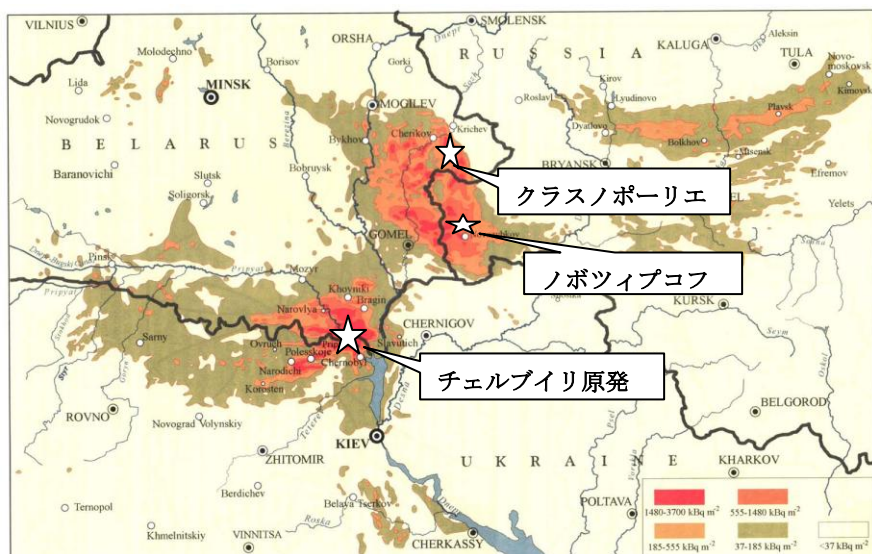
「立入禁止」の看板。檜葉町の「ビレッジ側」の「警戒区域」との境界。

ロシアのチェルノブイリ被災地から

アントン・ブダビチェンコさんを迎えて

この夏、ロシアのチェルノブイリ汚染地域、ブリヤンスク州ノボツィプコフ地区のNGO「ラディミチ」から、子どもたちの夏キャンプ「ノボ・キャンプ」などを担当しているアントン・ブダビチェンコさんが、原水禁の招聘で来日しました。「ノボ・キャンプ」には、「救援関西」の支援で、ベラルーシの汚染地域の子どもたちも毎年参加しています。アントンさんは、4月に来日したパーベルさんの息子さんで、彼が9歳の時にチェルノブイリ原発事故が起きました。（前号の「ジュラーヴリ」のパーベルさん講演会の記事もご参照下さい。）アントンさんは、原水禁の福島大会と広島・長崎の世界大会に参加し、また新潟や鹿児島などで、労組や市民による反原発集会でも講演をされました。帰国直前の8月9日に関西にも来て頂き、京都の学生さんが取り組んでいた「Go!Go!わくわくキャンプ」を訪問、そして夕刻には大阪で講演・交流会を持ちました。

チェルノブイリ原発事故による放射能汚染地図(137Csの汚染レベル)



アントンさんたちが住むブリヤンスク州のノボツィプコフ地区は、チェルノブイリ原発からは180km離れたロシアの汚染地域にあります。地区全体がセシウム137で55万5千ベクレル/m²（15キュリー/km²）以上に汚染されてしまいました。（今、福島でも「避難」の対象になっている地域と同じレベルの汚染です。）1990年にロシアでも、当時のソ連最高会議の決定が出さ

れ、1996-7年にすでに住民が移住させられた148万ベクレル/m²（40キュリー/km²）以上の汚染地域に加え、ノボツィプコフのように55万5千ベクレル/m²以上の汚染地域も「移住地域」に指定されました。しかし、約4万人もの人口があったノボツィプコフでは、主に財政的な理由から、ほとんどの人々が移住できずに汚染地での生活を続けざるをえませんでした。

地区では基本的に農業は禁止されました。25年経った今、農業の再開については、専門家の間でもいろいろと意見があるとのこと。アントンさんは、今でもノボツィプコフ以外の地域で採れた野菜を選んで買い、ジャガイモを買いに遠方まで出かけるそうです。事故前に6つあった地区の木材加工工場などは次々に閉鎖され、今は機会の部品工場と小規模の衣服工場が残っているだけとのこと。ブリヤンスク州などの汚染のひどかったロシアの4つの州では、事故当時18歳以下だった子どもたちの中で2002年までに483例の甲状腺癌が報告されています（2006年WHO報告）。そのような中で、汚染地域の住民が自分達でなんとか困難を乗り越えようとNGO活動を開始しました。

アントンさんが今回の来日のために準備された講演原稿を中心に、以下に報告をまとめました。

チェルノブイリで何が起こったのかという「事実」を、決して忘れてはならない

私はチェルノブイリ原発事故の被害を受けたロシア、ブリヤンスク州の住民を代表して、またNGO「ラディミチ=チェルノブイリの子どもたちのために」の代表として、広島・長崎被爆66周年原水禁世界大会に参加するために来日しました。



8月9日大阪集会で

今年は広島・長崎の原爆投下から66年、またチェルノブイリ原発事故から25年です。そしてフクシマの原発事故発生から5ヶ月が経ちました。チェルノブイリとフクシマの二つの事故は、並べて比較検討することができると思います。私たちは必要以上に感情的になることなく、事態を直視して、他の国でこれまでになされた、被害克服の方法のことを考えるべきです。なによりも重要なのは、前向きに事態を捉え、次に何が起こるかを予測し、それをどう克服するか考えることです。チェルノブイリ、フクシマという「言葉」を単に怖がるのはやめるべきだと思います。しかしまた、チェルノブイリで何が起こったのかという「事実」を、決して忘れてはならないのです。

チェルノブイリの放射能の雲がロシアの14の州を覆いました。そのほとんどがブリヤンスク州に降ったのです。私たちの州には、ロシアで唯一、「移住地域」や「居住禁止地域」を含む、全てのカテゴリーの放射能汚染地域があります。数千の村や街が汚染され、そこには州の4分の1の住民

(州人口150万人中、34万人)が住んでいました。1986年から2010年の間に26500人が、ブリヤンスク州から汚染のない土地か、国外に出て行きました。もちろん人々は、人間が引き起こした事故の被害を少しでも緩和するために、ありとあらゆること、最大限の努力を行ないました。

チェルノブイリの問題は、もう終わったことであるかのようにとらえる国際的な動きが強くなっています。また、ロシアでは、チェルノブイリの問題は、国レベルでなくブリヤンスクという小さな地方の問題であるかのように考えられています。ブリヤンスク州の当局は、この地域の「チェルノブイリ委員会」を解散し、その仕事を一般の社会サービス部門のひとつに改編すべきであると主張しています。ですから、被災者の要求を実現するためには、当局と渡り合わねばなりません。

「汚染地域」には多くの問題があります。20年前に国は「チェルノブイリ対策プログラム」をスタートさせたのですが、事故にともなう経済的、社会的被害を受けた地域レベルでは完全には実施されていません。医療も非常に多くの問題を抱えています。有能な専門家が次々と他の地域に移ってしまい、多くの才能ある若者が流出しています。これほど高い汚染レベルの地区の住民の大部分が、他の地域に依存し、従属的な立場に陥っています。地域の経済が破綻しています。汚染の高い地域には外部からの投資がありません。

「チェルノブイリの被災地の住民は、25年間、座り込んで、誰か力のある者が全ての問題を解決してくれるのを待っている。」と、言われることがあります。確かにそういうところもあります。しかし、被災地では様々な活動が市民のイニシアチブで行なわれています。私たち「ラディミチ」の活動をいくつかご紹介したいと思います。

NGO「ラディミチ」の創設

チェルノブイリが引き起こし困難な問題が、長期に及ぶものであることを理解した、ノボジプコフ市の教師やその教え子たちは、地域の人々のために活動する組織「ラディミチ」を創設しました。事故後、「ペレストロイカ」を背景に、いろいろと議論すること、「言論の自由」の大切さが認められましたが、そうして発言したことを実現するには、何らかの事業を経営することがより重要だと人々は考えたのです。

「ノボ・キャンプ」～ロシア国内での子どもの保養を

多くのNGOが、外国での「保養」のために沢山の子どもたちを送り出していた時に、私たちは、チェルノブイリの汚染地の子どもたちが、この広いロシア国内の汚染していない土地で、休暇を過ごすことのできる場所を見つけようと決めました。そして、1994年、子どもたちがまるでひとつの家族のように過ごせる、すばらしいキャンプを作り、「ノボ・キャンプ」と名付けたのです。このキャンプが始まってから数年間に、社会的弱者の家族、孤児、障害者などを含む、約8000人の子どもたちが参加しました。今では、ロシアだけでなく、ベラルーシ、ウクライナからの子どもたち

1987年に、まずは、地域の高齢者、孤児の寄宿学校、病人への支援から始めました。ロシア人の医師だけでなく、ドイツのゾーリングゲンから来た若いドイツ人医師も協力してくれました。そして、何よりもブリヤンスク州の住民自身が活動に参加し、生活を改善して、さらに他の地域からも模範として認められるような仕事ができるようになったのです。

も参加し、また他の国からの専門家が交流のために参加することもあります。

「ラディミチ」の活動の成果として重要なことのひとつは、その活動を通じて、ノボジプコフ市、ブリヤンスク州の学生ボランティアが、障害を持つ子どもたちとの活動に積極的に参加するようになり、その活動が何世代にも引き継がれてゆく環境ができたことです。学生たちは、夏のキャンプに向け、冬の間から準備を始めます。また、近隣の村へ、お年寄りを支援にゆくツアーを行ったり、環境を守る活動にも取り組んでいます。

障害を持つ子どもたちへの支援

「ラディミチ」はまた、ゾーリングゲンのドイツ人医師らと協力して、1993年に、脳性麻痺の子どもたちのリハビリテーション・センターを創設しました。これは、医薬品を使わずにマッサージなどを用いるボバース法です。センターの医師は、親が家庭でも子どもたちにマッサージなどができるように指導します。障害のある子どもと親の両方を支援するのです。この方法によって、多くの子どもたちが活動的になりました。また、伝統的な民間医薬品を用いた治療も用います。このセン

ターの活動は、ロシア全域、さらには国外でも認められるまでになっています。去年は、ロシアをはじめ、ベラルーシ、ウクライナ、リトアニア、レバノンから300人もの子どもたちがセンターでリハビリ・コースを受けました。

1998年には、知的障害児のための「社会的リハビリテーション・センター」を開設しました。旧ソ連の時代には、障害のある子どもたちや難病の子どもたちは、家から遠く離れた小さな村や街にある寄宿舍のある「小児ケアセンター」に収容

されることがほとんどでした。私たちは、長期にわたるケアが必要な子どもたちを、「小児ケアセンター」から連れ戻し、家族と一緒に暮らせるようにしようと考えました。そのために、毎朝、そのような子どもたちを私たちの「社会的リハビリテーション・センター」に招待し、遊んだりしながら、子どもたちが新しい集団の中での生活に慣れるようにしました。私たちは、ドイツのブッパータルにある特別学校と協力関係を締結し、私たちのセンターのスタッフが訓練を受けることのできるシステムを作りました。毎年、ドイツの教員

がロシアに来て教え、また、ロシアの専門家が一週間の講習を受けにドイツに行きます。

こうして、障害のある子どもたちに基本的で重要なスキルを身につける訓練を受けさせることの重要性を地域の人々も理解するようになりました。私たちの活動が成果を上げたのをきっかけに、市当局も、障害のある子どもたちのための幼稚園を開園しました。今では、公立の「特別学校」に入学できなかった重度の子どもたちを、私たちの小さな「特別学校」が受け入れています。これは困難ですが、重要な仕事です。

「コンピュータ・クラブ」～若者の知識と交流を拡げる

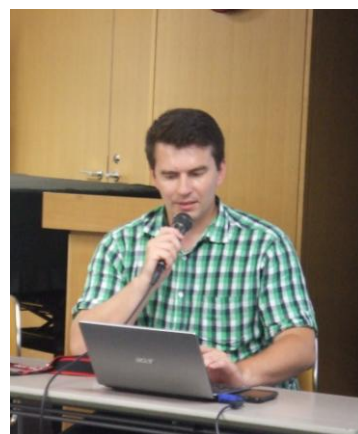
1998年には、「コンピュータ・クラブ・ラディミチ」も活動を開始しました。このクラブの活動は、国連開発計画（UNDP）やスイス政府の支援も受け、今では、ブリャンスク州に10のクラブができ、年間300人のティーンエイジャーと若者がこのプロジェクトに参加しています。インターネットを通じて、若者の知識の向上、外国語の勉強、交流の拡大が行われています。2004年には、ノボ・キャンプで初めての「国際コンピュー

タ交流」が開催されました。キャンプでのこの取り組みで、年間、120-140人の子どもたちがコンピュータ技術の基礎訓練を受け、ホームページの作成を学び、デジタルカメラを用いた写真処理など、多くのことを学びます。このようなプログラムへの参加は、ロシアの小さな村や、貧しい家庭から参加した子どもたちには普段は経験のできない重要なことなのです。

「私たちは世界を描いて、あなたにあげるわ」～子どもたちが世界から孤立しないように

他に重要な問題として、チェルノブイリ被災地に住む子どもたちが「孤立してしまう」ということがあります。被災地の外で、子どもたちや若者が「劣等感」を抱いてしまい、自分から孤立してしまうことがあるのです。このような問題を解決しようと、2000年に、ボランティアのアーティストのタロベルコさんが、「子どもたちの絵の国際大会」を提案しました。この「大会」では、どれも勝者はいません。「私たちは世界を描いて、あなたにあげるわ」というテーマで、子どもたちが、思い思いに絵を描くのです。今では、年に500-600人の子どもたちが、ロシア、ブルガリ

ア、ベラルーシ、ウクライナ、ハンガリー、ルーマニア、イタリア、インド、インドネシア、セルビア、ブルネイ、アメリカ、中国、等々、様々な国々から参加します。参加者全員が、賞状と大会への参加の記念品を受け取ります。チェルノブイリの被災地から参加した子ども



たちは、このような活動を通じて、大小様々な国から参加した子どもたちが、平等であることを感

「甲状腺検査」プログラム

2004年、私たちは「甲状腺検査」プログラムを始めました。ラディミチの事務所に併設して、「甲状腺超音波検査室」を開設しました。超音波診断装置は、ドイツからの支援として送られてき

じ、また世界に対して興味を抱くようになります。

ました。年間1500件の検査を行っています。2007年からはノボ・キャンプに参加する子どもたちの甲状腺検査も行っています。

NGO活動を担う若いリーダーの育成

また、私たちは、NGO活動を行うための若いリーダーの育成にも取り組んでいます。2004年から毎年、国際会議を開き、学生向け、組織の代表者向け、ボランティアのリーダー向けなど、様々なセミナーを開催しています。ロシアの小さな街でも、私たちのようにNGOを作ることができるという実例を示します。ボランティアとともに活動

し、その中からリーダーを見つけ出す方法、どのようなプランを立てて、どのように実行するのか、また公的機関からの「反発」をどう克服するか、会計報告をどのように作成するか、などのノウハウを伝えます。また、公開セミナーには、ロシアだけでなく、ベラルーシ、ウクライナ、ドイツ、フランスなどのNGOの代表も招聘します。

「チェルノブイリ博物館」～若い世代に伝えること、また被害の過小評価に抵抗して

2006年には「チェルノブイリ博物館」（展示室）のプロジェクトを始めました。これにはふたつの理由があります。第一に、この地方で育った若い世代の人々が、1986年にチェルノブイリで起きたことを全く知らないからです。彼らは、汚染地域のキノコや木の実を食べたり、野生動物や野鳥の肉、この地域で獲れる魚を食べたり、牛乳を飲んだりすることの危険性を知らないのです。そのために「博物館」の情報センターは、ノボツィプコフの街の学校の生徒達にチェルノブイリの汚染地で安全に暮らすために守らねばならないこととは何なのかを説明しています。

第二の理由は、2006年に国際原子力機関（IAEA）がウィーンで開催したチェルノブイリ20周年の国際会議での「声明」に対抗するためです。その「声明」で、IAEAは「チェルノブイリ事故の影響はたいしたことはない」と、公式に宣言したのです。私たちは、マスコミなどを通じて、このようなIAEAの見解には賛成できないことを表明しました。彼らには、放射性物質でこれほど高濃度に汚染された地域でも「安全だ」とする状況を作り上げることが利益になるのです。

「若者センター」

2008年には、ロシアとEUの支援を受け、「若者センター」の活動を開始しました。このプロジェクトは、ロシアのチェルノブイリ被災地の社会

的弱者である子どもたちとティーンエイジャーの現状を改善することが目的です。生活を安定させ、自分達で努力して問題を解決することも促します。

子どもたちとティーンエイジャーが、集える場所、悩みを相談できる場所を提供します。このセンターでは、悪習慣（アルコールや薬物依存など）を

防止し、健康的な生活を送るための教育的なプログラムなどがあります。

地球上の多くの人々の協力で「核の惨事」をなくしてゆける

「ラディミチ」は、ドイツ、スイス、オーストラリアなど、多くの国々のNGOからの支援で活動をしてきました。おかげで、年間、数千人の人たちが私たちNGOの活動による援助を受けることができます。数百人の若いリーダーが学び、NGO活動の経験を積んでいます。私たちは日々の

活動を続ける中で、NGOの非営利的活動が、地域社会に必要な貢献ができることを証明してきました。安定した財政基盤に欠けることは、私たちの弱点です。しかし、人々のためになる社会活動を、国の行政とは独自に行えることの可能性も感じています。

最後に、私を日本に招聘して下さった組織、皆さんに感謝します。

私たちは、この地球上で、何が正しいかを理解している様々な人々と協力して努力することによって、「核の惨事」をなくしてゆけると確信しています。



フクシマ事故半年の日に

「反核フェス」開かれる ～継続は力～

26回目の「戦争はいやや！核なんかいらへん！フェスティバル 2011」が9月11日に長居公園で開かれました。恒例の出店が並び、舞台では太鼓・合唱・アピールなどが繰り広げられました。今年はフクシマ事故から丁度半年にあたる日でもあり、特別に福島からのアピールがありました。



挨拶する山科さん

まず長崎被爆者であり反核フェスの代表である山科さんが、学校での語り部活動の出で立ちのモンペ姿に折り鶴を首にかけ、壇上に登り、元気に挨拶をされました。

福島県・双葉地区原発反対同盟の佐藤龍彦さんが福島からの現地報告ということで訴えられました。3月に東日本大震災と東京電力福島第一原発で重大事故が起こり、多くの作業員の被曝を伴いながらの懸命の作業にもかかわらず、事故は未だに収束していません。インタビュー形式で事故当時の様子、どのような状況になってしまったのか、そして今思うこと等を淡々と訴えられるその中に、原発事故によって故郷を、生活



アピールする佐藤さん

素晴らしいバレエです。また署名活動にも参加しました。救援バザーの売り上げは1万5010円でした。

今年は、公園に来た方にもフェスティバルが行われている事をアピールしようと、外周道路に「ノーモアフクシマ、ノーモアチェルノブイリ」と書き、それに参加団体が一言メッセージを書き込んだ、大きな大きな横断幕も掲げられ、一目を引いていました。

全てを奪われた悔しさ・悲しさ・憤りが伝わってきて胸が締め付けられる思いでした。佐藤さんは「綺麗な福島を返して欲しい」そして「脱原発」をと強く訴えられました。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西はいつものように、出店による救援バザーとポスター展示、それに舞台出演です。舞台はアピールと、ダンスコアポシブルによる創作バレエでした（次参照）。チェルノブイリ事故の放射能汚染によって翻弄される子どもたちや人々・・・そして・・・。まだあどけない可愛らしいバレエリナーといい、いつもながらの



チェルノブイリから福島へ、

「私達みんなの痛み」 という意味

～ダンスコアポシブルのバレエより～

反核フェスティバルも 26 年になりました。いろいろな思いで集まった、反核、平和、反差別、民主主義と人権擁護の声を寄せて重ねて 26 年。最初は山科さんに誘われて。ここでいろいろな人とも知り合えて。チェルノブイリのこと、ヒバクのことを、気負いせずに話せる、アピールできる、広場のような反核フェスティバルでした。

しかし、今年ほど「反核」が前進していないことに責任を感じる、くやしい思いの反核フェスティバルはありませんでした。福島第一原発の事故から半年。故郷をなくした多くの人々の奪われた日常は返ってきていない。健康についてのケアも保障も手つかず。だれも責任をとらず、関係ないがごとく財界からは「原発は必要」の声。

福島県の被災地よりこられた、佐藤さんのとつとつとしたお話しは、腹にこたえました。一時の避難と言われたのに、戻れず転々と。自宅は朽ちて、飼い犬は鎖につながれたまま死んでいた。

仕事もなく。家なく、寝る場所も落ち着かず、家族もバラバラ。放射能と四六時中向き合う解けない緊張。すべての目処が付かず。心に余裕がなくなり、少しのことでいらだちパニックになる。「根無し草」。

チェルノブイリの被災地の友人達は、時々「私達の痛み」と言う言葉で表現されていました。自分の町でプライドを持ち責任ある仕事をして地域の人々との絆を積み上げてきた人が、先祖代々大事にしてきた田畑と家畜を、すべてを失う。実際に住むところが奪われる、ヒバク健康への影響、生活が成り立たない、という個々の問題だけでなく、いや、この個々の問題がのしかかることも含めた、「持っていくようなない苦しみ」を「痛み」と。

ヒバク健康被害をわかってもらえないことにもいらだつが、「(危ないところに)なぜ住んでいるの」との指摘にも傷つく・戸惑うと言われていました。子ども達のために、居住区から削り取った表土は森に処分し、森は今も高い線量のため立ち入り禁止になっている。しかし、故郷への思い、子ども達への思いが、難しい状況の中で、住民の希望の源になっていると……。

「25 年前のあの春の日のこと」、「私達みんなの痛み」を、ダンスコアポシブルのバレエで再現してもらいました。そして、「私達は、ベラルーシの友人達の心の痛みを本当に理解していただろうか」と共に問い直しました。



楽しそうな子ども達、大きな子と小さな子、はじける笑い声とダンス、……そこに何かの異変、……しかし何も見えない・何も感じない……ダンスにもどる子ども達……しかし確かに何かの異変が……取り返しの付かない、悔やんでも悔やみきれない放射能汚染……嘆きと混乱……やがて、祈りと希望、歩みだす人々

チェルノブイリのヒバクシャの痛み、福島被災者の痛み。では？これは「私達みんなの痛み」ではないのか？

重いテーマでしたが、ホントはかわいい4人の子ども達と3人の妖精のようなお姉さん達と、2人の美人先生達の総勢9人の美しい舞台でした。……会場の多くの方に「よくわかった」「伝わった」「すごかった」と声をかけられました。チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の隣のブースの沖縄物産の方からサーターアンダギーいただきちゃいました。汗だくで踊った踊り子達は、のど詰まらせながら、サーターアンダギー食べて帰りました。ダンスコアポシブルの皆さん、いつもいつも本当にありがとうございます。

長澤由美

苦悩する福島県民、縮小する福島

安心して暮らせる日常生活を取り戻したい

ともに脱原発に向けて闘おう！

～「フクシマ事故から脱原発へ」集会開かれる～

福島原発事故から半年が経つ9月10日、「現地福島と関西を結んで『フクシマ事故から脱原発へ』」が佐藤龍彦さん（双葉地方原発反対同盟）をお招きして開かれました。

佐藤さんは「3月11日の福島第一原発の重大事故による放射能汚染の被害は留まるところを知らず、次々と深刻な事態が生じている。・・・産業が壊滅的打撃を受け・・・自治体の消滅という危機にも直面している。不信・不満・憤りが渦巻く中で、県民の願いは一日も早い原発事故収束であり、安心して暮らせる普通の生活を取り戻すことである。」と訴えられ、福島の直面している過酷な現実を語られました。100万人の県民が「放射線管理区域」レベルの汚染地に住み、10万人が県外に避難している現状。大地・海・空、全てが放射能で汚染されている現実。とりわけ乳幼児・子どもを持つ母親の苦悩。住み続けていいのか避難したほうがいいのか、又避難先から帰りたいくても帰れない現実。避難所生活も6ヶ月に及び、様々な苦しみ・不安を抱えての生活。福島県民は苦悩の連続のなかにいる。人口は減少し、200万人を割った、町は消滅し、福島は縮小している。復旧のために不眠・不休で働く自治体労働者・教員・医療関係者・郵便局労働者・土木労働者等多くの労働者。瓦礫・汚染土壌処理は遅々として進まない。佐藤さんは「たかが電気のためにこれほどのリスクを受け、過酷な避難と放射能に怯える暮らしを強いられて良いのだろうか」と問いかけます。さらに、事故収束のために、高線量の放射線下、灼熱の地獄の過酷な環境の中で大量の被曝をしながら命懸けで働かざるを得ない原発作業員。

福島は今や世界の「フクシマ」となってしまった。ことあるごとに「あの原発事故さえなければ・・・。」と怒りと苛立ちが募る。かけがえのない日常生活、美しい故郷は原発事故によって全て奪われてしまった。そしてこれからも放射能に曝され続ける。取り返しのつかない放射能汚染。佐藤さんは「綺麗な福島を取り戻すために」「脱原発」を目指して共に闘おうと力強く呼びかけられました。

短時間でしたが「ゴーゴーワクワクキャンプ・夏の家」を取り組んだ若者の報告もありました（p13参照）。5月のゴールデンウィークに引き続き、8月に、小1から中3まで20数名の男女を受け入れたこと、生活面や遊びなど盛り沢山の企画を準備したこと、又全員避難することは無理だと思っているので、避難できない人たちに来て欲しいこと等が報告されました。本当に暑期中、1ヶ月間に渡る長丁場を充実した取り組みで頑張ったようです。そのエネルギーに脱帽！移り住むのは難しいとひしひしと感じたし、ゴーゴーワクワクとしてこれからも続けていきたいと頼もしい報告もありました。

原発労働者の思いを詩に託したものに曲を付けた「俺は飲む」。ベトナム反戦歌であったが、今は「フクシマ」であり「腰」は引き返すことが出来るかどうかの分水嶺であるとの中山さんの解説付きの「腰まで泥まみれ」。両曲とも参加者の胸にストンとおちました。

主催者からは政府交渉と今後の課題の報告があり、これからは脱原発の運動と結んで住民・労働者の健康補償を求める運動を強めていきたいと決意が示され、脱原発の思いを共有しながら集会は終わりました。

猪又雅子

多くの出会いのあった

「ゴーゴーワクワクキャンプ「夏の家」」

私たちは、福島第一原発の事故により放出された放射能から子どもたちを遠ざけるため、5月のゴールデンウィークに4泊5日のキャンプを京都で行いました。

その後、もっと長い期間、放射線量の少ない土地（環境）で生活することで、体に蓄積された放射性物質が体外に排出され、抵抗力が上がると知りました。

もとより、少しでも長くキャンプをしたいと考えていましたが、そのことでさらにその思いを強め、8月に1ヶ月間のキャンプ「夏の家」を行うことを決めました。

7月31日から8月30日までの1ヶ月の間に福島・宮城・栃木から延べ57名の方が「夏の家」を訪れ、京都の地で時間を過ごしました。

ゴーゴーワクワクキャンプの企画として、ティピー（インディアンの住居）を作ったり、竹から紙を作ったり、草木染めをしました。

子どもたちに何かしてあげたいと様々なところから声があがり、持ち寄り企画がありました。韓国のお面を作ったり、劇をしたりというワークショップの企画。また、絵本やお話を聞いたり、音楽を聞く企画。近くの小学校でプールを借りて遊んだりもしました。大学のグラウンドで野球をしたり、子どもたちの希望を叶えての甲子園行きや京都観光など、1か月の間に多くのことを体験しました。

今回の「夏の家」を通して多くの出会いがあったことは、子どもたちにとっても私たちスタッフにとっても、大きな財産になったのではないかと感じています。

多くの人たちが一緒になって暮らすという非日常の場で、ご飯を食べ、遊び、眠るという普通の生活があり、笑い、泣き、喜び、喧嘩をして、叱られて、怒ったり、悲しんだりという日常の出来事の繰り返しでした。自分の家とも、学校とも違う生活の場でありましたが、8月だけはそこが自分たちの家であったと思います。



作製中の「ティピー（テント）」の前で（右側）

「放射能なんか消しちゃって」「去年まで家で野菜を作っていたのに今年からはもう食べられないの」というような子どもたちの声を直接耳にすると、これまで普通にできていたこと、当たり前にあっという間の生活ができなくなっていることをひしひしと感じました。

「夏の家」終了後に福島市から京都に移住をした家族もおられました。また、すでに移住を決定され

ている方、実際に家を探している家族もおられました。



アントンさんを囲んで

キャンプを通して知り合った人の繋がりが、見知らぬ土地へ出向くことや、移住を考え、実行に移す手がかりになったのではないかと思います。

今年の「夏の家」は終わりましたが、まだまだ福島第一原発の事故は終わっていません。来年、再来年、5年先、10年先とできる限りのことを続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の方々には、医療講習会やチェルノブイリ・ノボキャンプのアントンさんとの交流会を含め、多くの支援をいただきました。

そのほかにも、様々な方達に支えられて1ヶ月の生活を行うことができました。

たくさんの方達への感謝の気持ちと、ここでの繋がりを大切にしていきたいと思っています。

これからもどうぞよろしくお願いします。

ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ実行委員会 伊達一哉



カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2011.6.4～10.21

城晶子 村上玲子 和田満穂 鹿間桂子 田中章子 遠山薫 岡村達郎 中山一郎 田原良次 壺井進
折口晴夫 奥平純子 ル・パップ・ジャン・ポール 石橋喜子 古川一夫 嶋田千恵子 振津かつみ
根生恵子 久保美恵子 佐藤ちい子 増田京子 長澤由美 小谷ちず子 岡田由江 大月良子 崎山昇
3月行動を考える女たちの会 池田美幸 熊沢滋子 栗田千加子 原発の危険性を考える宝塚の会
木村英子 中川慶子 岸本久美子 村上雅洋 志賀直子 猪又雅子 佐野米子 津村富代 齋藤由佳 松田光代
阪口幸子 奥平さよ 松野尾かおる 村上千佳子 淡川典子 藤田達 即得寺 虎尾義弘 三田宜充 山下春美
石橋喜子 阪口博子 和田長久 公庄れい いなだ多恵子 橋本真佐男 遠山薫 ダンスコアポシブル
日下郁郎（順不同・敬称略）

9・19「さようなら原発集会」に参加して

久保 きよ子



千駄ヶ谷駅から明治公園に続く道には人・人・人
脱原発集会で、これほどの大集団を目にしたことは
ありません！！

6万人 大結集を実感しました。

主催者 あいさつ

鎌田慧さん、大江健三郎さん、内橋克人さん、落合恵子さん
澤地久枝さん、フーベルト・ヴァイガーさん(FoEドイツ代表)、
山本太郎さん、武藤類子さん(ハイロアクション福島原発)
「さようなら原発集会」で

会場に入りきれないほど集まった大勢の参加者
(19日午後1時55分、東京都新宿区の明治公園)



集会前の12時半頃、千駄ヶ谷駅を降りると、人人
人が駅構内にあふれていました。

明治公園内に はいることができたが、身動
きができないほどの人の数で埋まっていました。

集会の始まる13時にはすでに公園内に入るこ
とは出来ず、周辺の歩道には人があふれました。「もう
集会場には入れません。皆さん、後のパレードに参加
して下さい」との放送を聞きました。

原発にさよならしたいという人々の熱い思いを共
感できました。

年老いた母親を若い夫婦が何とかいっばいの会
場には入れるように足元を確かめながら進んでいる
姿を見たり、車いすの人が通りやすいように気遣っ
ている人々を見ました。感動の一コマでした。

福島県三春町から参加したハイロアクションの武
藤類子さんの話です。

現在の福島の状況について、「目には見えない
放射能が降り注ぎ、私たちはヒバクシャとなりました。
すばやく張り巡らされた安全キャンペーンと不安の
はざままで引き裂かれていく人と人のつながり。毎日
毎日、いやおうなく迫られる決断。『逃げる、逃げな
い』『食べる、食べない』『子どもにマスクをさせる、さ
せない』『洗濯物を外に干す、干さない』『何かに物
申す、黙る』様々な苦渋な選択がありました」と語り、

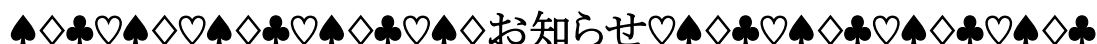
今後とも政府交渉、裁判、避難、保養、除染、測定な
ど福島県の人々の起こすアクションに注目して欲し
いと訴えられました。

14時すぎには、集まった人々が3つのコースに分
かれ、デモ行進を行い、楽器を演奏したり、プラカ
ードを掲げながら、「原発はいらない！」「原発の再
稼働をするな！」などと訴え歩きました。

「すごいパワーをもらった。来て良かった」と、心
引き締められる思いをすることができました。

これからの闘いとして、「脱原発を実現し、自然エ
ネルギー中心の社会を求める1000万人署名」は、
第3次締め切りは2012年2月28日とし、来年の3月31
日には、日比谷野外音楽堂での集まりを計画してい
ます。





***福島原発事故被災地から 飯舘村の青年と語る～計画的避難区域から未来を紡ぐ～**

日時：10月21日（金） 午後6時半～

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

場所：ドーンセンター 大会議室2

共催：若狭連帯行動ネットワーク

（地下鉄谷町線「天満橋」下車1番出口より東へ約350m）

問い合わせ：cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

***小さなお話し会～飯舘村の青年と語る**

日時：10月22日（土） 午前10時～午後2時

主催：まつなが畑

場所：まつなが畑 作業小舎（奈良県御所市僧堂113-2）申し込みが必要です。

まつながさんのブログをご参照下さい。 <http://blog.goo.ne.jp/matsuyuki165>

***反原子力デー 関西電力への申し入れ行動**

日時：10月26日（水） 午後3時～

主催：若狭ネット

場所：関西電力本社（地下鉄四つ橋線「肥後橋」下車徒歩5分）

***ウラン兵器禁止国際共同デー連帯集会 in 大阪**

日時：11月23日（水／祭日） 午後2時～4時半

主催：ウラン兵器禁止を求める国際連合（ICBUW）ジャパン

場所：エルおおさか（南館101号室）

集会前に梅田で街頭行動します！！

問合せ：du-ban-hibaku@theia.ocn.ne.jp

***チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西 発足20周年の集い**

日時：12月18日（日） 午後1時半～4時半

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

場所：大阪市立総合生涯学習センター 第1研修室（大阪駅前第2ビル 5F）

問い合わせ：cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp



カンパ・会費の御協力をお願い

3月11日、起こってしまったフクシマ事故以来「チェルノブイリ・ヒバクシャ」に思いを馳せながら、フクシマの被害者とも交流・支援を続けてきました。そして今年は特別な思いを持って、又ベラルーシを訪問いたします。事故当時の様子や思い等その貴重な体験に学びたいと思います。又子ども達の保養の支援等も引き続き行っていきます。是非皆様のご支援・御協力をよろしくお願いいたします。

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

〒546-0031 大阪市東住吉区田辺 1-9-12 山科方

郵便振替：00910-2-32752